

大学と地域による活動の場の生成：実践共同体に関する文献研究

新名, 佐知子
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/10274>

出版情報：九州大学心理学研究. 8, pp.85-90, 2007-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

大学と地域による活動の場の生成

—実践共同体に関する文献研究—

新名佐知子¹⁾ 九州大学大学院人間環境学府

Generation of the field for activity by merging the university and regional communities —A review of concepts concerning “communities of practice”—

Sachiko Niina (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Recently, the activity with different types of communities such as the university and region is active, as exemplified by the community development, the venture business, and the development of the innovative education programs. In this paper, based on the concepts concerning “communities of practice”, literature on “the developmental work research”, “change laboratory”, and “formative field work” were reviewed to investigate the way how the field for activity is generated by two different communities, i.e., the university and regional communities which have different living world. These studies were analyzed by focusing on the way how others intervene in the practice intentionally and on the developmental transformations in the field for activity. Through the review, the following questions were raised: “For whom are these activities created?”, “Are the practice and activity experiments?”, and “How long should the researchers and practitioner be involved in the activity?” Further research questions based on these questions were presented with the notion of “ways of participation.”

Keywords: communities of practice, practice and activity, intervention, transformations, merging the university and regional communities

はじめに

「大学と地域」という、片方は研究者としてのコミュニティ、そしてもう片方は現場の当事者としてのコミュニティであるように、相異なる日常世界をかかえたコミュニティが出会い、共に何らかの活動を行うことが近年盛んである。「大学と地域」が共に活動する例としては、社会や経済の仕組みをつくりだすようなまちづくり活動、大学を開放した生涯学習の機会の提供、産学協同といったベンチャービジネス、教育のプログラム開発などが挙げられる。

このように「大学と地域」という、異なるコミュニティが共に活動するその意義は何であろうか。例えば次のようなことが考えられる。①新しい知識やアイデアの開

発、②「地域の掘り起こし」と言われるような、あるコミュニティの資源やよさを再発見すること、③自分たちのコミュニティだけでは解決できないような問題を解決すること、である。これらは、単体のコミュニティだけでは実現が難しいために、研究者や専門家と、実践者である当事者とのユニットによる活動の場として、コミュニティの再編成が試みられる。

筆者は、「大学と地域」による活動として、大学が地域へ出向いていき、絵本を用いて様々な人が交流しあう場づくりを行う「絵本カーニバル」²⁾に関わった。この活動は、大学のスタッフと地域のスタッフが共に運営実施している。筆者がその現場に入って感じていたことは、「共に」という体制で活動を行うことの面白さと難しさである。

ところで、冒頭より「コミュニティ」という言葉を用いているが、「コミュニティ」という言葉は多岐に渡る分野で使われており、その意味も多義的である。新社会学辞典（森岡・塩原・本間 編、1993）によると、「コミュニティ」は、“地域社会、共同社会、地域共同社会、共同体などの訳語が用いられてきたことから理解されるように、地域性と共同性という二つの要件を中心に構成されている社会をいう。”とある。地域、生活の場というように「地域社会」に関わる理解と、連帯性や共通の関心というようなものによってつながっている「共同社

¹⁾ 本稿の執筆にあたりご指導いただきました、九州大学大学院人間環境学府研究院教授の南博文先生、菊地成朋先生に、心より感謝申し上げます。

²⁾ 「絵本カーニバル」は、21世紀 COE プログラムである、九州大学ユーザーサイエンス機構「子どもプロジェクト」<<http://kodomo-project.org/>>が行っているものである。2005年7月から福岡、熊本、岐阜など各地で開催している。「絵本カーニバル」は、約一週間の会期で開かれて、各地を転々と移動して実施する、移動型の活動（＝「カーニバル」）である。あるテーマを決めて選び出された数百冊から千数冊の絵本を展示しながら、地域の公民館や図書館や学校などの空間を様々な人が交流するしかけとして再デザインすることが目的である。

会」という理解である。このように、「コミュニティ」という言葉は、「地域性・共同性」の二つの意味を含んだ言葉である。

しかし、「大学と地域」というユニットは、地域性を飛び越えた共同体であり、前述のような「地域性・共同性」の意の「コミュニティ」では、捉えきれない様態のものである。知識を生み出したり、地域資源を掘り起こしたり、問題解決を試みるような活動の集団は、地縁や帰属にとらわれた集団ではなく、「実践共同体」と呼ばれる概念を参照すると理解が得やすいと思われる。

「実践共同体」は、レイヴ、ウェンガーによって初めて提案され、学習論の中で展開されてきた概念である(Lave & Wenger, 1991 佐伯訳 1993)。学習という行為、発達という現象は、個人の内部で生じる変化ではなく、社会や文化への参加によって、共同体の成員としてのアイデンティティを確立していくという捉え方である。レイヴらは、肉屋、産婆などさまざまな徒弟制の形態を例に挙げながら、特定の活動に従事する集合体「実践共同体」において、十全的な参加へ移動していく過程として学習を描いている。

このようなレイヴらのアイデアからスタートした「実践共同体」は、最近では、ウェンガーらがビジネス向けに書き下ろした書籍の中で、“あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団である”とし、「知識」を生み出す集団としての色彩を強く出した見方を提唱している(Wenger, McDermott & Snyder, 2002 櫻井祐子他訳 2002, p.33)。また、伊藤らは、状況論的学習の再確認、理論の意義の再検討をおこなった論文の中で、実践共同体は、“要するに、‘ある1つの実践に関与する人々のまとまり’のことである。”また、“コミュニティとは、一時的な寄合のようなものである。かれらを繋ぐものが実践なので、実践共同体と呼ばれるのである”と述べている(伊藤・藤本・川俣・鹿嶋・山口・保坂・城間・佐藤, 2004, p.85)。

このように、「十全的な参加の過程」、「関心や熱意などを共有し相互交流する人々の集団」、「実践に関与する人々のまとまり」というような表現がなされる「実践共同体」について平たく説明するならば、それは、「実践や活動の様態に依拠したまとまり」と言えそうである。つまり、地縁や帰属にとらわれない、実践や活動によって結ばれている関係性であり、一時的な性質のものという捉え方である。外から定式化できる性質のものではなく、広がりのある環境＝状況的であるという前提である。「大学と地域」というユニットは、このように、実践や活動に依拠した広がりのある環境と捉えることができる。

しかし、実践や活動による「実践共同体」は、不断の変化や動きの中で結ばれる広い諸関係の体系であるため

に、いかにしてそれを捉えられるかは難しい問題であり、定式化をめぐる様々な議論が展開されている。

佐伯(2001)は、「実践共同体」について、「関係論的な見方であるがゆえにわかりにくい」と述べて、概念の説明を次のようにしている。“レイヴとウェンガーは、‘共同体’について、‘それが何であるかについて、あらかじめ定義しない’という立場をとる。むしろ、人々の実践に注目し、それらの実践がどのような共同体の実践と見なせるかを、‘後から’考えてみようというのである。…‘結果的に’、人々が何らかの共同体への参加が始まったと見られたとき、共同体が‘結果的に浮かび上がって’くる性質のものとしているのである。”(佐伯, 2001, p.41-42)

このように、「実践共同体」は、「結果的に」あるいは、「事後的に」浮かび上がるという捉え方であるがゆえの難しさを指摘している。

また、福島(2001)は、“継続的に変化する環境の中での実践共同体とその参加者という枠組みが想定されているのは、実践共同体が直面する組織的な課題が、ある安定した解法を持たないという状態であり、それゆえある種の組織上の危機が次のフェーズに安定して移行できない、すなわち全体として一種のモラトリアム状態に陥り、それを結果的に持続させなければならないといったケースである。”と述べている(福島, 2001, p.162)。

これは、レイヴらの徒弟制の例のように、特定技能の習得レベルとその組織内での地位の向上が原則的に一致しているような、つまり、共同体への参加は社会的保証が暗黙の条件となっていて、そこで獲得されるアイデンティティは社会的評価体系に支えられていたシステムが、現在のさまざまな組織においては自明ではなくなっており、「実践共同体」が環境の激変によって危機に陥って安定を得ることができない状態の指摘である。例えば、会社において、部下の方が上司よりも熟達した能力を持っているような場合である。

このように、実践や活動の様態に依拠したまとまりである実践共同体は、地域性がいまいで、事後的な関係性で、アイデンティティが社会的に認められる保証がなく不安定なものであり、組織として危機に陥りやすいと指摘される。

しかし一方で、このようなあいまいさや不安定さは、コミュニティの再編成を図る契機と考えることもでき、実践や活動による不断の変化や動きに対して積極的であろうとする実践や研究が見られる。①研究者や専門家が介入することで意図的に活動の場の変容を試みるような研究や実践、②実践者たちが実践しながらコミュニティを構成したり、あるいは、コミュニティに対する見方が変わることを期待するような研究や実践である。例えば、①については、エンゲストロームの「発達のワークリサー

チ」など、②については、認知科学や教育学などでいわれている「状況論」などである。

そこで、本稿では、学習論から派生してきた「実践共同体」において、実践や活動の変化に対して積極的である概念や主張を手がかりに、相異なる日常世界のコミュニティが出会い、どのように活動の場が生成されていくのかについて、実践に参加する「参加の仕方」に焦点をあてて整理を試みたい。紙面の制約のため、本論では、前述①の、意図的に活動の場の生成を試みる実践や研究を取り上げて見ていくこととする。

1. 研究者と現場の当事者による活動の場の生成

「大学と地域」という相異なるコミュニティが実践を展開し、どのように活動の場が生成されていくのかについて、日常生活が営まれているコミュニティに研究者や専門家が介入することによって意図的に変容を迫り、現場の当事者と共に活動の場の生成を試みることを前提としている概念は、次のようなものがある。

「発達のワークリサーチ」

実践者が活動システムを分析し、現場をデザインし直すことを支援するような介入の方法論である。

提唱者であるエンゲストロームは、フィンランドの公立病院が抱えていた運営上の問題を見直すためにプロジェクトを立ち上げて、コミュニティ・労働の分配・ルールからなる実践のモデルを提案し、実践共同体が抱える矛盾の分析を積極的に実践している。この病院は、患者を医者が急患とそれ以外という分類のルールによって振り分けて診察していた。急を要する患者をスピーディに診察するためである。しかし、このようなシステムでは、医者がスピーディで非個人的な診断を行ってしまい、患者は満足できずに繰り返し再来院する。そのために医師の労働負担が増加して、患者は予約をして診てもらおうことが難しくなり、予約なしに診察してもらえ急患サービスに殺到しているという悪循環である。

このような矛盾は、日常の実践において現場の当事者だけでは把握することが困難なため、介入者が活動システムを単位にして分析して明らかにすると同時に、活動システムの新しいモデルの提案によって、新たな社会的実践の創造を実現していこうとするのである。矛盾の指摘、新たな実践の創造は、サイクルとして何度も繰り返され、活動の場は維持されていく（青山・茂呂，2000；Engestrom, 1987 山住他訳 1999；島田，2005；上野，1996）。

また、「発達のワークリサーチ」の「発達の」という語感、活動システムの新しいモデルによって実践がいかに転換し、その影響により現場がどのように変化して

いくかという意味合いによるものであると思われる。

「チェンジ・ラボラトリー」

「チェンジ・ラボラトリー（変化のための実験室）」とは、介入の方法論として発達のワークリサーチを実践現場において進めていく具体的方法である。実践の当事者と介入者が共に活動システムのデザインを促進しようとするプロセスは、「チェンジ・ラボラトリーセッション」と呼ばれる協働的な議論の場において進められる。

まず、実践のビデオ記録や音声記録から、実践の当事者は研究者と共に実践を疎外している矛盾は何かを分析する。これは、当事者が直面している障害を映し出す「鏡」とされている。当事者は、矛盾が映し出される鏡に向かう時、個人的な失敗あるいは危機として経験することが少なくなく、強力で予想もつかなかった、認知的・感情的、社会的な不協和が誘発される。介入者はこれらの過程を記録し分析すること、また、当事者が自らの実践を分析する中で、活動の抱える矛盾に気づき、解消していくことを支援することが要請される。

エンゲストロームは、このような介入者の役割について、「大胆な実験的態度を必要とする」と述べている（Engestrom, 1987 山住他訳 1999, p.18）。実験的態度とは、現場の抱えている矛盾を提示するだけでなく、新たな実践を創造するプロセスに力点を置くことである。つまり、矛盾に対する解決策としての実践を生み出して、実際にそれを試みることで射程に入れた方法ということである。また、現場を「ラボラトリー」として見立てているのは、矛盾の原因を個人的行為に還元するのではなく、現場のシステム全体によるものと見ており、矛盾の解決を目指した実践が展開されることで現場が変化していくプロセスに注目しているためと思われる（青山・茂呂，2000；Engestrom, 1987 山住他訳 1999；島田，2005）。

「参加デザイン／協働的デザイン」

参加デザインとは、建築や都市やコミュニティなどのデザインを、デザインの専門家とその地域の住民や実際の仕事に従事している人々が協力して行うアプローチである。

具体的な方法は、デザイナーがユーザーの目の前で模型などのプロトタイプをつくって見せて、ユーザーと議論しながらデザインの変更を行うやり取りにより、協働的にデザインするという手法である。プロトタイプも専門家であるデザイナーも変更に対して柔軟に対応できることが大切である。つまり、協働的な議論の場で、ユーザー側から出てくる具体的提案に対してデザイナーは自分のデザインに固辞せず対応できること、また、議論しながら目の前でアイデアを形にして見ることができ、

あるいはアイデアに応じて形を変更できるプロトタイプであることが必要とされている（青山・茂呂，2000；上野，2001）。

「形成的フィールドワーク」

「形成的フィールドワーク」は、それを通してフィールドを変容させていくことになる営みである。

「形成的フィールドワーク」での「フィールド」とは、実践という縦糸と研究という横糸で織られた織物のようなもので、実践法でもあり研究法でもある、実践と研究がしっかりと織り成されてはじめて成立する営みである。現場の当事者は研究協力者というより、実践を共につむぐ仲間とされる。「より良い」実践を形成していくことが原動力となり、現場の人びとと研究者が共に実践のパターンをクリティカルに検討し、豊かな部分をさらに伸ばしたり、問題や課題を同定したりしながら新たな実践をつくっていく過程に研究を織りこんでいくという方向で展開する。このようにして、実践を通して人を育み、現場全体を一つのシステムとして育むことを目指す。

「形成的フィールドワーク」の特徴は、研究者自身が現場の関わりを通じて課題に答えることを試みることである。従来のフィールドワークのように、厚みのある記述そのものを目的とするのではなく、実践を通じて人を「育む」ことを目指して活動が構成される。具体的には、「見ること・聞くこと」「観ること・聴くこと」「診ること・訊くこと」というステップを経る、関与観察を通じて実現される。研究者が現場に関わってみることで生まれてくるものを通して、さまざまな可能性が見えてくることを大事にするのである（當眞，2004, 2006）。

2. 活動の場の生成をめぐる疑問

異なるコミュニティが出会い、共に活動の場の生成を試みることにについて、研究者と現場の当事者の参加の仕方に注目し、「発達のワークリサーチ」[「チェンジ・ラボラトリー」]、「参加デザイン／協働的デザイン」[「形成的フィールドワーク」]の各概念を挙げて簡単にまとめたが、それらから見出せるいくつかの疑問点を以下にまとめる。

誰にとっての活動の場なのか

各概念では、主体性、責任の持ち方、主導権についての問題が取り上げられていない。活動の場における主体性や責任の問題は、その生成に影響する大きな問題である。活動の場は研究者や専門家はもちろんのこと、当事者、相異なるコミュニティのどちらにとっても活動の場であるが、実践の進め方によって、単体のコミュニティどちらかの意味合いの活動の場になってしまうことがあ

るからである。

「発達のワークリサーチ」[「チェンジ・ラボラトリー」]、「形成的フィールドワーク」の概念での活動の場の生成は、それまで主に「観察者」として、ある一定の距離を保った現場との関わり方であった研究者や専門家自らが、実践や活動に加わることが現場に影響することを踏まえて積極的に「介入者」として現場に入り、当事者と共に協議の場をもつこと、また、「参加デザイン／協働的デザイン」では、研究者や専門家と当事者がプロトタイプをもとに、その場でアイデアを創出するプロセスを共有しながら、協議することに大きな意義があった。

しかし、そのような積極的な参加の仕方が行き過ぎると、「現場の矛盾や問題を示し理解させるのは研究者や専門家の仕事」として、実践や活動を進めていくことになりかねない。

つまり、研究者と当事者が共に協議しながら、実践、活動することを重視している活動の場であっても、最終的に問題を示し判断するのは研究者や専門家であって、結局、当事者が、研究者や専門家に活動の場をコントロールされていると感じてしまう恐れがあるのではないだろうか。

このように、元の単体のコミュニティ間の力関係が、活動の場を意味づけてしまうことをどう受け止めるのかについては、各概念では明らかにされていない。

実践や活動は「実験」なのか

「発達のワークリサーチ」やその具体的方法である「チェンジ・ラボラトリー」による参加の仕方は「実践や活動は実験である」ということが前提とされているが、それは自明なことだろうか。

「発達のワークリサーチ」での研究者や専門家には、現場の抱えている矛盾に対する解決策としての実践を生み出して実際にそれを試みる、「大胆な実験の態度」が必要とされる。また、「チェンジ・ラボラトリー」では、実践の当事者が直面している障害を映し出す鏡に向かい、個人的な失敗や社会的な不協和が誘発される過程を、研究者や専門家が記録、分析していくが、これらの概念では、現場の当事者は研究者や専門家に対する「被験者」ということなのだろうか。

「実験」は、理論や仮説が正しいかどうかを一定の条件を設定して試し、確かめてみるというのが一般的意味である。このような「実験」に対する捉え方について、当事者と研究者の間で必ずしも一致せず、現場の当事者にとっては、活動を「実験」として肯定的に受け止められない状況があると思われる。問題を抱えて解決策を模索していることが日常である現場の当事者にとって、その状況は切実なものである。確実に成果をあげねばならない、あるいは早く問題を解決しなければならないプレッ

シャーに常にさらされているからである。当事者たちは、「解決案を創出し、確かめる」という、処方箋ではない活動の事態を、簡単には受け入れられないのではないだろうか。

研究者や専門家はいつまで活動の場に関われるのか

「発達のワークリサーチ」, 「チェンジ・ラボラトリー」, 「形成的フィールドワーク」では、活動の場は、長い時間にわたって問題を見出し、新しい実践を創造することを反復・循環する「サイクル」であり、それは永続的な「動き」であるとされている。そうであるので、研究者が実践に関わる期間は予め決まっているわけではない。けれども、研究者や専門家にとって、活動の場が日常の現場となることはない。したがって、長い時間にわたって関わっていても、いずれは活動の場から抜ける日が来る。そうすると、研究者はどのタイミングで現場から抜けるのだろうか。おそらく、問題や矛盾が解決された、あるいは、知識やアイデアが得られたと感じられた時に関わりをやめることになるのだろうが、それは、研究者と当事者が共に実践を行っている活動の場において、研究者だけで判断されることだろうか。

また、研究者や専門家が長く現場にいれば、当然、現場になじんで当事者との距離も近くなっていく。したがって、異なる文化を持ち込むことによって現場の変容を迫るような「他者性」を発揮する研究者の役割は、時間が経てば経つほど難しくなるのではないだろうか。他者としての研究者はこの問題をどう処理しているのだろうか。

さらに、研究者がいなくなった後の活動の場は、どうなるのだろうか。元の単体のコミュニティとして日常に戻るのだろうか、それとも、活動の場自体なくなってしまうのだろうか、あるいは、新たなコミュニティとして活動を継続していくのだろうか。

つまり、一旦開いた活動の場の収束を、何とするのか、あるいは、どのようにつけるのかについてはよくわからないのである。

「生成」から「マニュアル」になってしまうのではないか

「チェンジ・ラボラトリー」での鏡、「参加デザイン／協働的デザイン」でのプロトタイプのように、方法論としてのこれらの概念では、使う道具も、また、その手順もある程度決まっている。そのために、実践や活動による環境の変化を積極的に取り込む、あくまでも「動き」の中で生成されるということから乖離して、「その手順さえ踏めばアイデアが創出される、問題が解決される」とマニュアルのような捉え方に傾いてしまうかもしれない。そうすると、研究者や専門家が現場の当事者を置き去りにして、「フィクション」として、何らかのアイデアや問題を作り上げてしまう恐れがあるのではないか。

以上、活動の場の生成について、実践に参加する「参加の仕方」に焦点をあてて整理を行ってきた中で浮上してきた問題点である。

おわりに

本稿では、「大学と地域」という、相異なるコミュニティの出会いによる活動の場の生成には、実践や活動の「動きや変化」をどのように取り入れるのかが鍵であることが理解され、研究者や専門家が意図的に変化を起して活動の場の生成を試みる、実践への参加の仕方に注目した。このような活動の場の生成では、活動の場として成立する時間も、実践の進め方も、活動の場の意味合いについても、研究者と当事者の両者間でのせめぎ合いの末に決まっていくため、見通しが立ちにくく、実践や活動を「やってみないとわからない」状態である。

このことからわかるように、活動の場の生成についてもっとも大きな課題は、活動の場を開いた後に、活動の場の収束を何と見るのか、収束をどうつけるのかということである。つまり、実践が何に向かって進んでいて、どのような状態になった時に活動の場とみなせるのか、コミュニティの未来はどのような場となっていくのか、見通しをどのように持つかが最大の課題なのである。それは、研究者だけで行うのでもなく、また、当事者だけで行うのでもなく、両者が実践を「やりながら」見極めていくしかないのである。

これらの課題と疑問点を踏まえて、相異なる日常世界のコミュニティが出会い、どのように活動の場が生成されていくのかについて、今後、「参加の仕方」という観点からどのようなリサーチを企画できるか、いくつかのリサーチクエスチョンを提示してまとめにしたいと思う。

①どのような役割として実践に参加しているのか

活動の場に関わる者が、実践や活動の中でどのような役割として関わっているのかを分析する。活動の中では、例えば、「スタッフ」、「ボランティア」、「支援者」、「実行者」など、様々な役割があるが、これらの役割は予め定まっているものと見るのではなく、実践の中でどのように生起してきて、どのようにその役割として参加するようになっているのか、注目して見るのである。具体的には、参加者が自分のことを、あるいは、他者のことをどのような役割で呼び合っているのか、実践の中で話される会話から言葉を拾い集めることで追究できるのではないかと思われる。

②どのように活動の場として認知されるのか

どのような状態になった時に研究者及び現場の当事者どちらにとっても活動の場となるのか、双方の活動の

場としての認知のされ方を分析することで、そのヒントをつかむことができるのではないかと考える。それは、実践の参加者である研究者や現場の当事者個々人の活動の場に対する理解に注目するのではなく、参加者を含めた「もの」や「できごと」のローカルなつながりによって活動の場が成り立つという捉え方を、「状況論」の視点から考察できるものと思われる。

③新しい局面に出会う場として活動の場はどのように実現できるか

動きや変化を取り入れた実践や活動を行うことが、当事者にとってはネガティブな意味合いで捉えられることについての代替案を見出したい。大学と地域が「実験者」と「被験者」という関係ではなく、実践や活動の未知な側面を「冒険者」として共に冒険するように、新しい局面に出会う場として活動の場はどのように実現できるか、その具体的実践や活動を考え、実践や活動から実証したい。

引用文献

- 青山征彦・茂呂雄二 (2000). 活動と文化の心理学 心理学評論, **43**, 87-104.
- Engestrom, Y. (1987). *Learning by Expanding: An Activity-Theoretical Approach to Developmental Research*. Helsinki: Orienta-Konsultit.
- (エンゲストローム, Y. 山住勝広・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取義宏・高橋登 (訳) (1999). 拡張による学習: 活動理論からのアプローチ 新曜社)
- 福島真人 (2001). 状況・行為・内省 茂呂雄二 (編著) 状況論的アプローチ3 実践のエスノグラフィ 金子書房 pp.129-177.
- 伊藤 崇・藤本 愉・川俣智路・鹿嶋桃子・山口 雄・保坂和貴・城間祥子・佐藤公治 (2004). 状況論的学習観における「文化的透明性」概念について: Wenger の学位論文とそこから示唆されること 北海道大学大学院教育学研究科紀要, **93**, 81-157.
- Lave, J., & Wenger, E. (1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- (レイヴ, J., & ウェンガー, E. 佐伯 胖 (訳) (1993). 状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加産業図書)
- 佐伯 胖 (2001). 学習とは、実践共同体への参加である 子どもの文化, **33-8**, 36-43. 子どもの文化研究所
- 島田 希 (2005). 教育実践研究における介入の方法論としての発達のワークリサーチ—ヴィゴツキー理論の応用へ— 教育科学セミナー, **36**, 37-47.
- 当真千賀子 (2004). 問いに導かれて方法が生まれるとき—形成的フィールドワークという方法— 臨床心理学 **4-6**, 771-783.
- 当真千賀子 (2006). 形成的フィールドワークという方法—問いに応える方法工夫 吉田寿夫 (編著) 心理学研究法の新しいかたち 誠信書房 pp.170-194.
- 上野直樹 (1996). ワークプレイスにおける拡張による学習 教育心理学研究, **35**, 163-165.
- 上野直樹 (2001). 状況論的アプローチ 上野直樹 (編著) 状況論的アプローチ1 状況のインタフェース 金子書房 pp.1-23.
- Wenger, E., McDermott, R. A., & Snyder, W. (2002). *Cultivating Communities Of Practice: A Guide To Managing Knowledge*. Boston, Mass.: Harvard Business School Press.
- (ウェンガー, E., マクダーモット R.A., & スナイダー, W. (著) 櫻井祐子 (訳)・野村恭彦 (監修)・野中郁次郎 (解説) (2002). コミュニティ・オブ・プラクティス: ナレッジ社会の新たな知識形態の実践 翔泳社)